

令和 2 年 5 月 16 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13977

研究課題名（和文）レヴィナスの宗教的テキストにおける教育思想：近代ユダヤ教育思想史の構築に向けて

研究課題名（英文）Levinas's Philosophy of Education in his Confessional Texts: Toward a History of Modern Jewish Educational Thoughts

研究代表者

平石 晃樹 (Hiraishi, Koki)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：00786626

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、エマニュエル・レヴィナスの「宗教的テキスト」における教育思想の解明を目指したものである。従来、レヴィナスの宗教的テキストは、彼の倫理思想のユダヤ教的源泉という観点から、または彼の哲学的テキストと断絶した信仰上のテキストという観点から研究される傾向にあった。対して、本研究は、両者を架橋するものとして教育というテーマを設定することで、教育思想家としてのレヴィナスの姿を新たに描き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

レヴィナス思想における教育という主題に関しては、東方イスラエル師範学校の校長としてのレヴィナスに対する伝記的な関心やレヴィナス哲学の教育学への応用といった観点からの研究が従来なされてきた。これに対し、本研究は、レヴィナス思想に内在するテーマとして、なおかつ、分断して扱われる傾向の強いレヴィナスの「哲学的テキスト」と「宗教的テキスト」を架橋する主題として「教育」を定位することで、彼の教育思想を総合的に検討することができた。そして、このような作業により、「倫理思想家」という一面的な理解には切り詰められない新たなレヴィナス像を描出することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate Emmanuel Levinas's philosophy of education in his confessional texts. These texts tend to be considered as a Jewish source of his ethical thought, or as simply religious texts which are disconnected from his philosophical ones. By setting the concept of education (enseignement) as a bridge between two types of Levinas's corpus, this study tried to shed light on a new aspect of the philosopher that we were most likely to understand as an ethical thinker.

研究分野：教育哲学

キーワード：レヴィナス 教育哲学 教育思想史 ユダヤ教育思想 共同体 責任 教え

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、レヴィナスの哲学的テキストにおける「教え (enseignement)」の概念に着目し、「教えられる」という受動性に立脚したレヴィナスの教育思想の特質やその哲学的背景を解明する研究に従事してきた。しかし、この研究を遂行する中で、レヴィナスの教育思想のもう一つの源泉をなすヘブライの伝統の重要性が認識されるに至った。例えば、思考の生起にとって他者との関係は不可欠であるという『全体性と無限』におけるレヴィナスの主張は、「魂の内的対話」(プラトン『テアイテトス』)という形式をとる思考の孤立的生起に対する批判という哲学的意義を持つ。しかし、思考をめぐるこうした考えはさらに、「二人で思考する」ことを根本に据えるユダヤ教の伝統的な教育思想にも関連づけられるものである。また、レヴィナスは、30年以上にも長きにわたってユダヤ人師弟を育成するための教育機関「東方イスラエル師範学校」の校長職を務め、その立場から、数多くのユダヤ教育論を執筆しているという事実も看過できない。このように、レヴィナスの教育思想を総合的に理解し、「教育思想家」としての新たな側面を十全に描き出すためには、レヴィナスの宗教的テキストにおけるヘブライの伝統に根ざした教育思想を解明することが不可欠である。加えて、以上の見通しを獲得する過程で、本研究が位置づくより広範な研究領域が浮かび上がってきた。それはすなわち、フランツ・ローゼンツヴァイクやマルティン・ブーバーといった、レヴィナスとも影響関係のある他の近現代ユダヤ思想家たちとの教育思想史上の連関である。事実、ローゼンツヴァイクは大学での就職を辞してフランクフルトに「ユダヤ自由学舎」なる成人教育機関を設立し、1920年代に多くの教育論を残している。1929年に早逝したローゼンツヴァイクを継いで同校の校長を務めたブーバーについても事情は同様である。その意味で、本研究は、レヴィナス教育思想の総合的解明という点では研究代表者のこれまでの研究の更なる展開であると同時に、近代ユダヤ教育思想史の構築というより広大な研究に着手するにあたっての端緒をなすものと言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、レヴィナスの宗教的テキストにおける教育思想の研究を通じて彼の教育思想を総合的に解明し、もって近代ユダヤ教育思想史の構築に向けて確かな足がかりを得ることである。従来、レヴィナスの宗教的テキストは、「他者の顔」を中心に織りなされた彼の倫理思想のユダヤ教的源泉という観点から、または、彼の哲学的テキストと断絶した信仰上のテキストという観点から研究されてきた。対して、本研究は、両者のテキストを架橋する鍵概念として「教え」を位置づけることで、レヴィナスの教育思想を再構成することを目指す。この作業により、「倫理思想家」という固定的な理解には縮減されないレヴィナスの新たな側面を照らし出すことが可能になると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、「教育」を「伝統」の「伝承」という観点から捉えた上で、以下の3つの研究課題に順に着手しながらレヴィナスの教育思想を総合的に把握することを目指した。

(1) タルムード講話における伝統論と伝承論の研究

60年代以降断続的に行われたタルムード講話で、レヴィナスはテキストを「教えをもたらすもの」として捉える自身の解釈理論を打ち出している。口伝律法を収めた文書群であるタルムードの注釈を通じて問題とされているのは、解釈行為を方向づける歴史的規範としての「伝統」とその刷新、及び、書物を介した将来の解釈者たちへの「教え」の「伝承」である。解釈行為に含まれる時間性と先行する解釈者たちとの共同性という観点からタルムード講話における伝統論と伝承論を検討した。

(2) ユダヤ教育論における伝統論と伝承論の研究

書物を介した伝統との対峙と「教え」の伝承という教育の主題は、レヴィナスのユダヤ教育論においても中心を占めるものであるが、そこではさらに加えて、教育を通じた共同体の維持と世代継承という論点が前景化されている。ここでは、近代における伝統の摩耗による「教育の危機」(アレント)という事態を踏まえつつ、伝統への単なる回帰でも伝統の放棄でもない第三の道の提示という視角からレヴィナスのユダヤ教育論における共同体論と世代継承論の内実を検討した。

(3) 伝統論と伝承論からみた近代ユダヤ教育思想史の展望

モーゼス・メンデルスゾーン以降のユダヤ啓蒙主義の流れを思想史上の背景として設定しつつ、ローゼンツヴァイクやブーバーといった、レヴィナスの思想に影響を与えた他のユダヤ思想家による教育論を検討した。これを踏まえ、レヴィナスの宗教的テキストにおける教育思想の特質をより客観的に評価し、近代ユダヤ教育思想史の一端を、「伝統」の「伝承」としての教育という視座から把握することを試みた。

4. 研究成果

本研究の研究成果を上掲の(1)～(3)に対応させてまとめると以下のようなになるだろう。

(1) レヴィナスの解釈理論の骨子を把握すべく、『4つのタルムード講話』序論等の一次文献の読解と分析を行った。その結果、レヴィナスは、とりわけ構造主義的アプローチから距離を取りつつ自身の解釈理論を彫琢していること、そして、テキストの語りうる意味の「豊饒性」・「現代性」・「普遍性」がテキストを「教えをもたらすもの」たらしめていることが明らかにされた。また、教育と伝統というテーマに関連しては、伝統の摩耗による教育の危機という認識に立脚したアレントの教育論の読解に取り組み、教育という主題にそくして二人の思想家を相互に読み解く確かな見通しを得ることができた。

(2) 東方イスラエル師範学校の校長という立場から戦後に発表されたレヴィナスの多くのユダヤ教育論については、国内では入手困難な文献をパリでの資料調査にて集めることができた。ユダヤ教育をめぐる数多くの論考を貫く主題の一つは、第二次世界大戦中に破壊されたヨーロッパのユダヤ共同体 わけでもフランスのそれ をいかに再生するかというものである。本研究では、レヴィナスのユダヤ教育論が置かれた社会的コンテクストについて関連文献にあたりながら、他方でユダヤ教育論という舞台上で論じられるレヴィナスの共同体論とそのいわゆる「哲学的テキスト」において主題化される共同体をめぐる哲学的思考とがどのように照応し、あるいは断絶しているのかを検討した。

(3) レヴィナスと関連の深いユダヤ思想家の教育論について検討を重ねた。とりわけローゼンツヴァイクについては、時間という制約において生起する思考と他者との本質的な連関や書物の重要性、そして「翻訳」としての「教育」という教育についての根本的な理解などに関して、レヴィナスの教育論と密接な関係があることが明らかになった。また、近代におけるユダヤ啓蒙主義というより広い背景の中にレヴィナスの教育論を置きなおして再解釈することを試みた。近代ヨーロッパにおけるユダヤ人の解放はヨーロッパのキリスト教的文明への同化の途を開くものであった。ここにヨーロッパの啓蒙思想に範を仰ぐユダヤ啓蒙主義が生まれてくるのだが、レヴィナスの教育論においては、同化を拒否しつつ、さりとて民族主義に邁進するのでもない、いわば第三の途を探り出すことが問題とされている。こうした見立てのもとレヴィナスによるメンデルスゾーン論などを再読することで、彼のユダヤ教育論が扱ってたつ思想史的射程の広さが認識されるに至った。最終的に、レヴィナスの教育論は、ヘブライズムとヘレニズムという相異なる源泉から生まれたレヴィナスの思想的複雑さを映し出す鏡のひとつとして理解しうることが明確になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 平石晃樹	4. 巻 18
2. 論文標題 「責任と自由 『存在の彼方へ』における善の無起源性をめぐって」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『学ぶと教えるの現象学研究』	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平石晃樹	4. 巻 116
2. 論文標題 「思考と外部性 社会を見いだす教育哲学」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『教育哲学研究』	6. 最初と最後の頁 22-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Koki HIRAIISHI
2. 発表標題 “Repairing the World: The Problem of Constitution of the Objective World in Totality and Infinity”
3. 学会等名 13th Annual International Conference of the North American Levinas Society（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koki HIRAIISHI
2. 発表標題 "Sensibilite et subjectivite: Autour du concept de jouissance dans Autrement qu'etre"
3. 学会等名 国際シンポジウム「個と普遍 エマニュエル・レヴィナスと極東の思考」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Koki HIRAI SHI
2. 発表標題 "The Revival of Moral Education in Post-War Japan"
3. 学会等名 Asian Law and Society Association 4th Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 教育思想史学会	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 888
3. 書名 教育思想事典 増補改訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考